

8/6-5 (1)

俳諧資料カード

年代	文化十三丙子
編者 (筆者)	延史
書名	(延史 旦)
備考	元島
	新訂 2 冊

(下垣内蔵)
厚紙本
(奥本二冊)

文化十二丙子年

歳旦

立春

七十に成て年よりあたりたり

梅佛

老ふのち甚とぬりて庭の雲

馬六

暮るるやあむまふ手は乾か

吳津

暮立や神の所末乃人あつろ

嵐水

暮るちと思ふに心あつ庭の霧

牧考

呉市阿賀北五丁目三番八号
下垣内和人
電話〇六三二七一九六五番
〒737



初日

初日乳人も花さく深きう

一圭

その日の心もも娘も四方の声

虚洞

松林の初おきくや初日お

女 笠舟

庭の木もあもあるまや初日の心

吳北

大福

大少や芝の初お梅乃壺

路角

大ゆくにあむや柳の灯の光

路全

大猫や一吹句お松乃う也

古銅

大方くや茶のうすはひき

芳水

大方くや茶子年よ茶お

筵史

裏白

うらふよ茶子茶も並

其川

ともしくや又茶お子茶

朝尾

茶白や茶うよ茶

風里

字らふお旭乃白お

雪齋

雲白お大急のうけ重ひりり 吳風

鶯

鶯や鳴りてはあきあき 希言

鶯のあきあき世の初音は 西中

鶯やまてはうあはれぬの声 豊浦

鶯くひすの拍子みはくぬか 都合

鶯のけいれいあはれぬ日なり 露基

青陽

山松や雀もくくるふ代の歌 少年 九花

あまを汲や向ふ子りしま 夏久

夕桐子窓やあはれぬ日なり 宇拍

菌固やまてはあはれぬ声 渚嵐

遠くあめや公おさほる松の声 曾外

あはれまる水子久しき柳を柳 玄々

半初小恵方少年女いとちとるきり 里よ

号や松の木子集ておりてく、きく

姦しこのころかきあう初産女不潔

土着まうけてめえし悪蕨の海、光起

万半のおのむきするや釣雀、文衣

元日や寄きされいよとそめ系、蝶衣

人のりあ返るよ鳴や福夢叶、ひて

上下のさくくしよさようめのむ尼荷香

人先子世とよろこぶや初馬、露宿

書初や巻の星うりあき墨の色 霞外

蓋とれハ系玉少りの雑糞水 至五

万半の法外てつるくや松の巻 松波

新法き四巻戴いて法共うか 桃宇

元日や神も仏と系あて台 三花

川先の釣口申さうやんきの妻 改山

初元や巻も寄き山ゆらん 青蛛

養年大悪櫃子代よろ川 其柳
 初鳥にふいそくあうりり 鳳山
 門松子娘して好む乾日り分 里曉
 蓬萊若や人もたかおるまきまき 漢芝
 福芝重下旭のりこる今ふの音 梅十
 掛ひりり 桐千賀あゝる 桐 友仙
 川海さくうらひりりを川を 松宇
 初元や穀まきさるる水跡 路宅

万葉のまきこも花乃口ひきき 皆可
 一 他や神代の倭式系未まき 佳一
 蓬萊まき並へてうさる火種は 蘭枝
 雀乃へて世も静ありたのまき 夏木
 大やぐや古まきるの自在中 九可
 松の氣乃穴子のちるやめ乃まき 桃甫
 元日やちりくそまき 春屋
 万代や花のはしめ乃後妻州 とく

とくあて日も出せよ万葉集 九つ
未度よ終日うけやうけり 外 深涼
幾代のはゆりも 屠獲の酒 冠剛
幼屠屋けハ 積きこころゆ 作系系 吳東
後妻字子細もあひひききり、 一炊
ち川霧の霞がさそいせの海、 夢る
鏡中の鏡うけたり 喜たく 竹葉歌 一技
志すやう 葎もあひひききり 庭の雲、 俊之

幼東風の程たしあう庭の雲 文略 七葉集
一とせのゆめよりあや花乃妻 たの市 枕流
孟乃子少うたのやむの妻、 里月
重ひこゝる系年焼く花の妻、 三曉
後妻叶はせりあのせめやう、 ひと
元日やむまよあひひききり、 一巢
大幅の妻は来りたりあひひききり ヤス 素葎
三室よりけりあひひききり ゆい 物日く物 市傳

古たをり山ノミの来る秋の雨ノミ 雨ノミ
勢乃うらむちつめて今秋の喜小泉 十可

延史

目のえる対小窓くや 福喜州

まの蓬菜の 薫ふ 暖 一圭

雪平 燈籠のあ乃喜沈く 都合

来てハ一日 驚乃手傳ひ 昔水

名月の帯とうけるところ 汁 函金

舟乃たよりむやうそそを 風里

厚ウの夢祝も墨を垂ひ布し 画中

かゝるの袖もくつるきのよき 龜筭

夕雲のそを人山くさる山の陰 圭

土切のけで 枯茶をやく 史

憂るも知らぬ夫婦の育ち振 水

初づく姿を 暮る奉山 合

身の瘦と寝るも月の薄明り
 法れなしと汲袖控るあり
 出る花叶とむさん子刈て行
 ちつとも吹ぬ風乃らりりめ
 立のちるふ駕の塩屋の夕乃ち
 帰る花雀忠羽たきせす
 花子幕敷よと思ふはうりこ
 雲流すく喜ののち真
 珠 史 津 之 史 珠

歳暮

市に出で寝笑捨んとし決意
 赤くとも玉地ぬるやとしのれ
 後喜叶を並りり年のをれ
 のち指や柳の枝と笑ふ切
 夜めそ喜と待りり喜喜
 花のあゝ日の満れりり年乃喜
 花をハ喜めくものよ哀歌り
 事久 鳳山 吳東 桃宇 雲外 寄宿 梅十

山里や編と穿くくし一の著 閑里

年の庵も知くて施やなたき 一か

町く子居る合つくや大二十日 市蓮

甚子古き壺と見え山原や蝶拂 漢芝

娘う家敷よ師走の厩かど地 うつこ

豆折子戸の尻きりり 市札給 皆可

月と日とさままゝ 添く 磨う 云く

年の善松栴はくり 庭木うね 蘭板

凌穉の影折子のひて年の善 奇峯

船の居小皆あややあきう休 佳一

申向くして目鏡かくこす 拂 九可

鳥柴年忘念

探題

年の市口も是ちや小りあふ 一圭

くし浪も静ありたり 國乃凡 孝甫

障をすたひく 所走くそら 吉銅

蝶拂子舞むおのや南窓 虚洞

大いふ親子連なり 首垂山 竿舟

鏡揺や蒼の足甲の庭乃林 気水

露分の夜々こそあり 菖の世 路角

階庭の茗荷ハふるしとて 忘 函金

筆ちかく年ハ行ちる 松の世 希言

掛乞の戸口子重子 拂ひきり 蚊考

肩板のあはれハ 養ハ長配 吳風

をいふり忘れ 幼りり 寶舟 露産

松林子身を 泣ありり 除夜の鐘 芳水

板の弓ふ 蓮 委きり 大三日 馬六

喜道し 何処の 梅やら 白ひ来る 風里

梅葉る 塵おそく ありとて の坂 吳北

柳賣ありく 東風 吹やうか 其川

年の尾や 柳と 流し 終の 籠 雲喬

それとて 水胡 顔あり 繁叶 賣 都合

喜を待顔や朝陽乃雀あて
呉津
摺の史乃交り涼し年終
延史

兩節

健る平今年小うこく柳り眩 玉浪
神佛せうまぬ時を疎敷の陸
万葉は拍子もあめてたしり為 南雄

明けや栞も思そふ幼日の也 氏女
え口や葉心の中も後毒叶女 糸吉
嬉掃や嵐の子まておてさへく
元日や根法もきて葉乃持とら 如休
心道よ山も切はるや 幼うすえ 葛笛
一番小神乃夷よりたしり為 花旋
小富士く霧をあり三司の歌 杜若
日の新よ色と福をやるめの也 東柳石番

鳥巢乃春免

人の皆をぬきて 携乃夕夜 玄蛙

つらしまあて

磯より葉はぬは 以さく被う如 亭卵

題 羽衣

さゆ娘をさくけり 浦の松 夏久

正月の根へよくえ申る 小松の如 葉葉

寺撫まじや 雲乃の帯より 朱巻

餅とさすをさへえ 以夕暮 吉名 吟風

おしあへて 鈴日またそり 春の山

雨を以てはくれて いくや 小田の半 路全

陽をさむくハおこるくさめ 嵐夕

あぬるむ 枕のほし 此春乃山 梧来

春の水 沙の上と流せきり 蘭枝

長閑さに應じてあはれ雀うす 雀 閑雲

猿引の鳴てはけり五加木地 吳凡

春の月淡世ハ松の葉ひたり 壽旦

橋さる新ゆれりおゆら月 一重

ゆるくわく河や少む橋の籠月 大村 可勝

秋月さつきと一た藤深うら 七口市 窓芦

改訂てま砂地廣し春の月 雲若

皆人うちさゆりたり春の風 於時西

赤やせまいかくやせまーく春の鳥 梅佛

とろとまの鳥おぬすや春の鳥 北洞

水春や大さよまー雨せら粒 西条 菜籠

夕暮や日如露出て春の田く 古銅

春の鳥の末も鳥菜の白ひく 赤家末 麦為

垣根草うらめ菜の位可南 迄史

只の口と鳥人をさし 梅乃也 くら

目の足るおと美うらり栲の石 曾外

糸をけなほ付ちり字め乃也 帛 林阿

喜柳や志のひ色しに志こめあ、 五井

清くくと朝陽となつる柳う角 五石

おーつ、栲口切 小庭う那 栲宇

咲まをいたく信しけり、 赤椿 亀由

糸州の深山は事うし 苗乃志 小泉 至蝶

めんさしの為であるなる志の州 本々 僕六

油氣のふよ浮りり 藤とさ アカ 白山

咲ちちておをるもおまぬ莖う如 其川

うら乃子栲あき流いなるうらり 西中

梨子のむ半 為るう見以ちり 嵐夕

人の世のさむや栲乃 乾すめ 素心

月懸あれも終乃 出くううな 帛 汀湖

一文乃 倭ーハやまし 志所 栲 休祭

人のえる枝うう 咲や 物ささく 花旋

藤柄やむ三日乃夕日夕
古江

子ゆつてまきの深さよ
馬六

雪子狭しと男あ木の向う
竹麿 七時

雪や松く雪乃借
初秋 七時 俊儀

雪乃あけまると霧きり
栂正

山彦小押うさあ
維子の巻 吳北

元佐あるや山のたれと妻の巻 女
里川

揚雪花つらふは
えへて雨近し 霧外

駒多る乃色や
朝日の昇る時 三時 南塘

陸はきくさくさ
といひくう 雁 あか 芦角

可船は目の定まぬ
地うし判 大村 悠々

小原や乃藝おろせ
ハ胡蝶うさ 夏之

系紋となわし
てり 胡蝶山 皆可

孫くけて抱か
ああや 胡蝶 女 紫風

車井は塔のま
つこき日 如うね 尸カ倍 三休

山里や梅乃帯と
まぐ 蛙 柴籬

五月朔日系崎

八幡社より詣て

出づるはひそく小雲む五月朔 諸荒

味画撰

出也桂て月又む五月十二日 素巻

故やう穴小皆よこれりり 宿の程 因時 不台

夜多りのみふハ等々地解之程 都合

麻おくれて糸身ひとりの夜崎 北固

梅百の入るハ口車に中らうりり 北平 菜花

瘧て足れハ目の上小何り重々吐器 アカ 不及

ありいり志うけしのおさうな 芦角

菽子のむ一本つて乃其うう車 均啾

あらし何る標乃姿や公牡丹 桃宇

蓮咲て何の姿乃あつハあり 巻巻 藤十

萍の花付て来る赤鴨う那 赤子院 鹿門

松子や花のねちと吹てん 皆可
 石葛や足踏めて飛ぬハ牙う志ある 北洞
 協のいとむきふユ吏や 杜若 夏久
 めいきうと猫ハ履くうきすき 紫雲
 茶の戸乃小百も白おあやめか 朋義
 麻刈て思てこれハ近き隣う角 和道
 夕魚や我何うけある小百性 梧東
 鳥類や層雲と仕そこあい 雲雲

欽立乃弁ちり庵のホとぶら 虚洞
 山彦も教の内あり 郭公 吳風
 待うちハ出らるのあし 杜宇 下流厄 素月
 ひらいてハ定うあうぬそ 時を 素溪
 蜀魂啼や一度子 人乃あり 露外
 田のくハある木と括て罌子毒 アハ 夫木
 蒼とまの州不蒼乃白ひう角 味人
 笛吹て蒼と峰や菽老家 くらと

石の夢校乃事此處の處ら 曾外
 以り来ても夜の夢やわさる夢 其柳
 篝火乃消て船舟のけりぬ山泉 至蝶
 汲水もと吾の夢よ 四星夢
 者人乃袖の帯や帯羽乃夢 渚嵐
 扇もも嵐乃つきて庵中秋 三花

秋くの跡思ふ情し吾の顔 梧来
 奇岬とそれと見るよ吹堂名 十三 星譜
 目の是る肉りく知よあきの風 未白
 船をりやれ松を折る山鳥 尾 和平
 稲妻や地も穴あく雲色何う 苦水
 隙やりの夢て知る彼岸うか 鳳亭
 りの月を不供とひる岬木く那 士方
 鉛糸に海して夢乃事可事 亭卵

松風を折こび者のそめごとくか 曾外
根の深き葉と長れなる霧し水 流石
以灯とちうくに森とく 秋の響 秋討る
南天の雲も世話あり秋のくれ ^{アカ}如松
小仕業の短く 枝り名残りを 夫味
巻とハ控よと 相乃あみりり 皆可
極とくく 漱の音やちる柳 汀雨
船中の夜乃ひくことよむすき 暮光

雨たぬる夜や芒を人乃ふむ 延史
凡吹乃甚えてけ 繩子う車 其仙
葉の戸やすきくと児と味 一湖
る晴のすきよとすか細なる 致平
大風のともうま申るすきう明 三巻
秋のや毎日ぬくは 青 妻屋
秋くいたあき秋の産る ^{クモ} 耳雨
明残る秋ハ木のくあり 縮の花 風郎

山深しは東刈子おも葉の花十六 香洲
 虫の音は桑に灯りのす葉葉に 柳宇
 夜ふと疎るるう冷いう 秋乃疎和泉 玉斧
 缸の振乃滑て暗くめ境う車田坊 香
 淋しさと来てハ借るや淡の暗 夏夏
 うらうと只ゆいこむや香の香キヨ運 不及
 受るおと受て冷し星乃露 玉鈴
 鈴風の響吹出さ葉山子うね 一夏

更くして香の字さよおとく水 文香
 香性の脊戸門もあき世分弘 南坊
 和丁乃おおとを子夜明う那 如笑
 鳴くめや馬の子耳と立て居る 可耘

山深しは東刈子おも葉の花
 虫の音は桑に灯りのす葉葉に
 夜ふと疎るるう冷いう
 缸の振乃滑て暗くめ境う車
 淋しさと来てハ借るや淡の暗
 うらうと只ゆいこむや香の香
 受るおと受て冷し星乃露
 鈴風の響吹出さ葉山子うね
 更くして香の字さよおとく水
 香性の脊戸門もあき世分弘
 和丁乃おおとを子夜明う那
 鳴くめや馬の子耳と立て居る

道後温泉

木かじしや病子造こむ温泉の傍
 鷲老
 風平吹寄らるる小鳥こら申
 坂考
 去りしは屍向けく鳴世馬の系
 白圭
 本枯や桐樹のこる
 松葉の賣
 舌舌
 幼時る人の名髪めうつくし
 巴江
 去くそやは良ハぬるう口の香ふ
 可転
 山派て時るまぢり
 夕やうす
 耳古

松杉のくせよ時るふ山森可南
 素ふ
 縁うらやうや時る乃降時分
 均味
 まりの木れ中やうや時る
 東柳
 雲ふととるや縁うま
 西坡
 南云乃葉の大きちよと秋の重
 襟衣
 雲乃色まきくの付し日のせう
 紫雲
 窓ぬくえよや敷る一志さう
 江左
 うれはや松ハ森とく候の考
 枕宇

糸宿の夜に埋むや樽中も灰 玄蛙

ぬきあぐ狭い文くらや炭乃上 三花

とよりのくえふや炭焼人の歌 一湖

炭の電や時百の残る夕けーき 風里

口切や乾口を容よさー白ひ 夏久

夏ま日とらめや肩よあらき 送史

麦苺マ冬子ーすむす左阿くね 繁羅

埜埜の冬子とえせらる小妻の 雨舟

くあひのすまや小妻の是ら糸 る雷 葉吟

湯振よ夢の如くや小糸月 前巻 彦翁

乾くや水柱の是乃口の素 一枝

秋の鳴るおとたーく水沙の叩 千可

冬月や隣乃念佛やあきさ 栲束

冬の月おし付られて穀の奈 女 星傳

冬の月川子柳の奈うきり奈 尾 里翁

冬の夜や病付ハ人の戸と扣く 岫翁

疎なるき煙草一ふく金こりり る香 紫雨

秀山や為勢松年子日のうらふ 紫萱

持鶴の後系よ眠る小村り南 宋羅

日の習る喜々するあう教本の想 其柳

日の入ハ松子そハまる 為勢可南 烏苗

巻の脊よ夕日のたぬる為勢山 如休

大餅の吞てたま出た為勢うか 和切

山系也や為勢のよこす片ひさし 吳津

何る中枝様う志くすえくむ アカ 不尺

大鷲の手に切こまる山立松 三花

鷲峯に柳の教松くハへり 蝶衣

木危や月ハたぬうそおち物 素巻

逢来

上下とよそ中待らん初日のお 文語 耆友

琴ひひとすめられり年忘

山々や主婦出て折麻島 山 梨雲

三花

懐乃兒う歩りげとや梅忠花

身子付おは浦乃何こり 延史

鶉のままそ喜のそありりきり 花

あめのはちるふ砂虫うへ 史

草初と六切とき月の下系 花

立花としてり花のちる宿 史

算はくあれはるははは世や

あろのすこし 曉乃うを 花

法螺貝と額子何そ一孫あり 史

よー世く山子きるはくあり 花

ふ重れをくれくり壺子成 史

筆の先より悉乃ほころひ 花

草うろく氣うせまるとて切拂 史

鳩や花のヤセふるそき 花

川迄乃松葉の影系田の端 馬六
猿もとよき花の鷹ほらう 史
見才あうつくる 土 花
川迄乃柳葉子折あし 花

嵐水

昼影やうろく 霞る日 照雨
塚乃松葉の影系田の端 馬六

若くみせまき戸口をさきうけて 古銅
魚乃白ひのをあれうひうら 吳北
鳥物の月の志あうとあ振ひ 雲香
鴨 啼くころせかいき 吳凡
大宮の笛乃青きも秋の暮 盧洞
岩倉山をたふしてかく 水
いらよまほら一日ほらくや 六
峯掛の石をさきうとあ 銅

荒布も化ふハせーとあり年入
廻さけて 暮らう 妙々 妙哉
善除の善ううとせは月夜あり
田の虫 おくる 藪の 下 下
枯れり 吹は小善もはくうたき
招明の妙 星に よるは 汗 顔
十分お妙 宿と 候ありて
く 妙あり 暮ら 乃 川 妙

北 洞 六 水 洞 風 音

長宗さふらふも妙なりとの系
人あり云ぬ 一時の 乃 夏
年暮ハ雀の おろし人守をうり
きせる 千ありと 候す 善 善
折明て 捲乃 急きて 風 不 巧て
志のふらふ系ハ 蠶も ともうす
赤人の 文を 何と 妙 妙
漱平 光る 石を 何 何

音 北 洞 六 水 洞 風 音

村百乃重う晴れハ西う吹
七乃乃陸をあらんと撞守
蘇も月為七日の姿なり
委と激平一志める 狩衣
身の上とゆる蕨子張るらん
折委子すふ庭の白砂
裾層ハワの向平朽たやら
糸ハ流れて水はうりあり
風 亭 北 洞 六 水 洞 風

天地の草えぬ眺め乃花咲て
はのハ描布とあえる恙叶
洞 筆

曾外

四又中乃橋は日の入九月りて
る氣やつくる弓張の雲 送史
いと唱曲突の先は宛明て 鳳山
算の書地 琴子とと由子 委外

祝ひ事喜子延あし人のゆふ ぬ竹

ひそり又嘆し 畑乃多仙 桃宇

起くみ獄てそくく多乃罨 諸気

うつとあさす 小聖也水 其柳

十ヲはく日雇の徳と並へ立 漢芝

祝ハ忌もあは汗乃香くす 梅十

合歡の本れ淋しき花子氣はく史

懐しとあふ山魁のあふ 曾

夕月のわくくほとふ芳の陣 霧

あとの茶と溪へ真也流 山

畠地と姑入末より抄ひきき 宇

あきふす申。碓礮寺の陸 竹

縁人ともあて控ひし花盛 柳

持しる筆にのちふ糸穂 乳

あのを彼厚日知乃定りく 十

念仏りく子を連れて来る 芝

世の中此をれを善くたてて
 二上山を山平にれし
 于都とあつれは考め写して
 途乃駕の門は去く事
 押けて急急する面あさ
 府ありやいとあふさし
 木の層と禁て一日くまはし
 南めはるとあさく日暮
 曾 史 山 行 宇 峯 柳

凡の整の月夜くふ集る事
 あふくあさとあふ
 忌えしてゆれは馬のつはく
 朱子集る山際乃門
 乞食の荷と取ははく石の上
 ちうつあき物考のし
 花の咲木陰の葉も花と持
 よき友とあてあふり永日
 芝 十 史 曾 山 行 宇 峯 柳

雨の夜や漱平一婦の指のり

音も森子よふふ 冬の山陰 路角

集撰む孫のゆとまて年暮て 送史

立ちひく子まを洗つて 梁

音の月本緘子のあふあの方 角

松の指のりくまきくそを 史

土着下 巻て並へるま 梁

晴日の夜ハ 森るあとも森す 角

ありけす地震のけう風子奴 史

山の窟とちよつと見えけり 梁

きうあふあ籍不足と濡されて 角

石場の葉を飲ぬ日ハあし 史

りあ月乾かす人の待せり 梁

ぬのり人をあとかくらん 角

蒸乃葉子 姑風の吹はくり 史

一日とす。各々ありあや

石臼子窓の旭の光し如し

持て置くも考ふ 大釜

時あくる花の盛るいつくしま

浪の報再一松くふ喜

み

史

方

み

執筆

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

御書物は三兵衛本細工志

すり毛の賣茶ちじり判摺信房

御用向々々 ね背もねを帯上

廣嶋平田屋橋西緒 南江入

鳴屋彦兵衛

